

人権

ゆかりの地をたずねて

丹波・丹後編

もくじ

はじめに		1
案内マップ		3
1 浦嶋(宇良)神社 海上の道	伊根町	4
2 味土野 ガラシャ玉子	弥栄町	6
3 大風呂南墳墓群 鉄の文化	岩滝町	8
4 洗者聖ヨハネ天主堂	宮津市	10
5 舞鶴引揚記念館	舞鶴市	12
6 学童集団疎開	綾部市	14
7 高松地方裁判所判決事件と福知山区裁判所	福知山市	16
8 夜久野茶堂	夜久野町	18
9 大原の産屋	三和町	20
10 内藤ジョアン	八木町	22
11 石田梅岩 心学の祖	亀岡市	24
12 保存された牢屋	京北町	26
編集によせて		28

表紙写真 「与謝之大絵図」(江戸時代、成相寺所蔵)



青龍三年銘鏡(方格規矩四神鏡)

平成6年(1994)1月、丹後半島中央部の丘陵上に築かれた赤栄・峰山町大田南5号墳から出土

はじめに

京都人権啓発推進会議では、平成7年度から「人権ゆかりの地をたずねて」を発行していますが、今回で第5集を数えることになりました。

この冊子は、京都府内に残る人権ゆかりの場所をたずねて、そこで生きた人々の歴史などを振り返るなかから、さまざまな人権問題について学び、私たちの人権意識が高まることを期待し、作成しました。

「人権の世紀」といわれる21世紀を間近に控え、人権尊重を日常生活の習慣として身につけ、一人ひとりがお互いの個性や価値観の違いを認め合い、共に生きていける社会を実現するための努力が、私たちには求められています。

(財)世界人権問題研究センターや多くの先生方のご協力を得て、これまでに48話を紹介してまいりましたが、幸いにも多くの方々からご好評をいただいております。

今回は、地域版の第2編として京都府の丹波・丹後地域の「人権ゆかりの地」をたずねました。

この冊子が、人権に関わる問題を自分の身近な問題として考えていただく一助となり、人権への関心を深めていただければ幸いです。

平成12年2月

京都人権啓発推進会議

1 浦嶋(宇良)神社 海上の道

伊根町

浦嶋伝説は、「万葉集」などでは、大坂の墨古(住吉)と関連づけられています。御伽草子で一般化する浦嶋太郎の伝承のふるさと、まぎれもなく丹後国与謝郡の地域でした。浦嶋子の伝承は「日本書紀」の雄略天皇二十二年の条にはつきりと書かれていますように、浦嶋子は丹後の「余社(与謝)郡管川の人」として登場します。

「丹後国風土記」逸文には「日本書紀」よりも詳しい伝承が記載されていますが、「日本書紀」に丹後の浦嶋子の説話が収録されるようになった事情には、持統朝の「撰善言司」のメンバーのひとりであり、大宝律令の撰定に参加した伊予部連馬飼が、かつて丹波宰であったことも関係があると思われる。

京都府与謝郡伊根町本庄に鎮座する浦嶋(宇良)神社は、浦嶋子を主神とし、相殿神に月読命・祓戸大神を奉斎する古社です。「延喜式」にも明記されている式内社で、貴重な数多くの社宝が伝えられています。

重要文化財の「浦嶋明神縁起」・白練緯地桐桜土簾肩裾文様織小袖をはじめとして花菱重甲時絵玉穂笥・桐唐草時絵用赤子箱、鎌倉時代の木造狛犬、熊面・狂言面(十八面)などにも、浦嶋神社の伝統がしのべれます。毎月三月、おごそかに執行されている延年祭(京都府登録無形民俗文化財)、八月の「宇良神社祭礼芸能」(京都府登録無形民俗

文化財)も神事芸能の息吹を今に伝えます。

「日本書紀」や「丹後国風土記」逸文の説話に海中の蓬萊山(蓬山)や、仙衆(群仙侶)などがみえるのも注目されます。不老長生の神仙思想や道教の信仰が、海上世界の常世の信仰と重層して具体化していることがうかがわれます。蓬萊山は道教の東方海中三神山のひとつで、徐福が伊根町の新井崎の浜に渡来したという伝説が残っているのもたんなる偶然とはいえません。

司馬遷の「史記」には、方士であった徐福が、秦の始皇帝の命をうけて、東方の仙島に不老不死の仙薬を求めた伝えが載っています。徐福の渡来伝承は佐賀県や和歌山県などにもありますが、北ツ海(日本海)にのぞむ伊根町の渡来伝承は、浦嶋伝承と重なりあつて、古代における海上の道をよみがえらせます。日本海沿岸地域は、大陸文化の表玄関の役割をはたしていました。

「裏日本」という用語は、明治二十八年(一八九三)のころから使われるようになり、明治三十三年(一八九八)に入ると地域的偏見を含むようになりませんが、浦嶋神社の信仰と文化はそのゆがみを照射します。誤った歴史認識をたてずことは、人権文化創造の前提になります。

(上田正昭)



浦嶋神社



浦嶋明神縁起絵巻(掛幅形式)

メモ●「浦嶋神社」は、KTR宮津線天橋立駅より丹海バスで約70分「浦嶋神社前」下車すぐ

2 味土野のガラシヤ玉子

弥栄町

明智光秀の次女として生まれた玉子（あるいは玉）は、十五歳のとき細川藤孝（幽斎）の子息忠興と結婚します。父同志がもと足利氏の家臣であり、信長の仲媒で成立した結婚でもあったことから、まわりから祝福された結婚だったといえます。勝龍寺城（長岡京市）に夫とともに住んだ二年間は、玉子の人生で最も幸福な時期であったといえましょう。

ところが一五八二年、父光秀が主君信長を討つという本能寺の変が起り、父が「天下人」となった期間はすぐ終わり「逆臣」の娘の名が玉子に冠せられることになりました。秀吉をばかかった夫は、数人の男女の従者とともに味土野に玉子を幽閉します。

味土野には「おさきの岡」という平坦な丘があり「女城」と呼ばれる城跡があります。ここが玉子が幽閉された地であるとされています。玉子が幽閉された地であるので、のちに「女城」の名が付けられたのでしょう。谷を隔てて向かい側の山には「男城」があり、警固の従者はここに詰めていたといえます。玉子は一年十か月をここで過ごします。

この間に玉子に大きな影響を与えたのは、侍女清原マリアでした。清原家は儒学を伝える学者の家だったのですが、マリアの父も母もキリシタンの教えに共鳴し、その影響でマリアは生

まれてすぐに洗礼を受けたとされます。そして十二、三歳のころ、養育会という捨て子を集めて育てる会に入会したといえます。マリアはキリシタンとしての信念に裏打ちされた積極的な女性であったのでしょう。人里離れた地での閉じられた生活は、マリアの影響力を大きくしたものと考えられます。玉子自身にとっても、味土野の地での不遇な状況は、遂に玉子の心の自立と、キリスト教信仰への傾斜を生んだと考えます。

玉子には、もともと儒学の素養がありました。それは、清原家が著名な儒学者であり、また、細川氏や明智氏、なかでも細川氏は清原家と深い結び付きがあったためでもありました。その清原家でさえキリシタンに共鳴したという経過を見ていた玉子には、キリシタンは遠い存在ではなかったのです。

のち大坂玉造の細川邸に入れられた玉子でしたが、ここでも外出は許されず、監禁状態の中で、マリアから洗礼を受けガラシヤの名を授かります。関ヶ原の合戦に際し、徳川方に付いた細川氏の邸を守って、玉子は石田方の軍勢に囲まれて自刃して死を迎えました。人質という立場も完遂し、自らの信念も貫徹したガラシヤは、前近代の人権抑圧の中での女性の生き方の一つとして、見事な事例を私たちに示してくれそうです。

（田端泰子）



ガラシャ玉子隠棲地跡

メモ●「ガラシャ玉子隠棲地跡」は、KTR宮津線峰山駅より車で約40分

3 おおぶるみなみふんほぐん 大風呂南墳墓群 鉄の文化

岩滝町

京都府与謝郡岩滝町の大字と滝大風呂で、注目すべき発掘成果がありました。丹後半島の南にある阿蘇海に臨み、南東方向に派生する丘陵上に築かれた大風呂南墳墓群の発掘調査は、平成十年の七月から実施されています。五基の埋葬墓のなかで、一号墓は弥生時代の後期末半、二号墓は弥生時代の後期末頃のものと考えられます。

とりわけ重要なのは、一号墓の第一主体部から鉄剣十一本、ヤス状鉄製品、見事なガラス製釧(腕輪)や鋼製釧十三個、ガラス製曲玉などが出土し、一号墓の第二主体部から鉄剣二本、鉄鏡二本、やりがんななどがみつきり、二号墓の第一主体部から鉄剣一本とやりがんななどが検出されたことです。

ガラス製釧はコバルトブルーの深みをおびた外径九・七センチ、内径五・八センチ、厚さ一・八センチの完形品でした。成分分析の結果、カリウムの含有量が多いカリガラス製で、鉄によって着色されていたことが判明しました。中国製の可能性があるという説もありますが、この地域の首長クラスの権威を象徴する副葬品です。

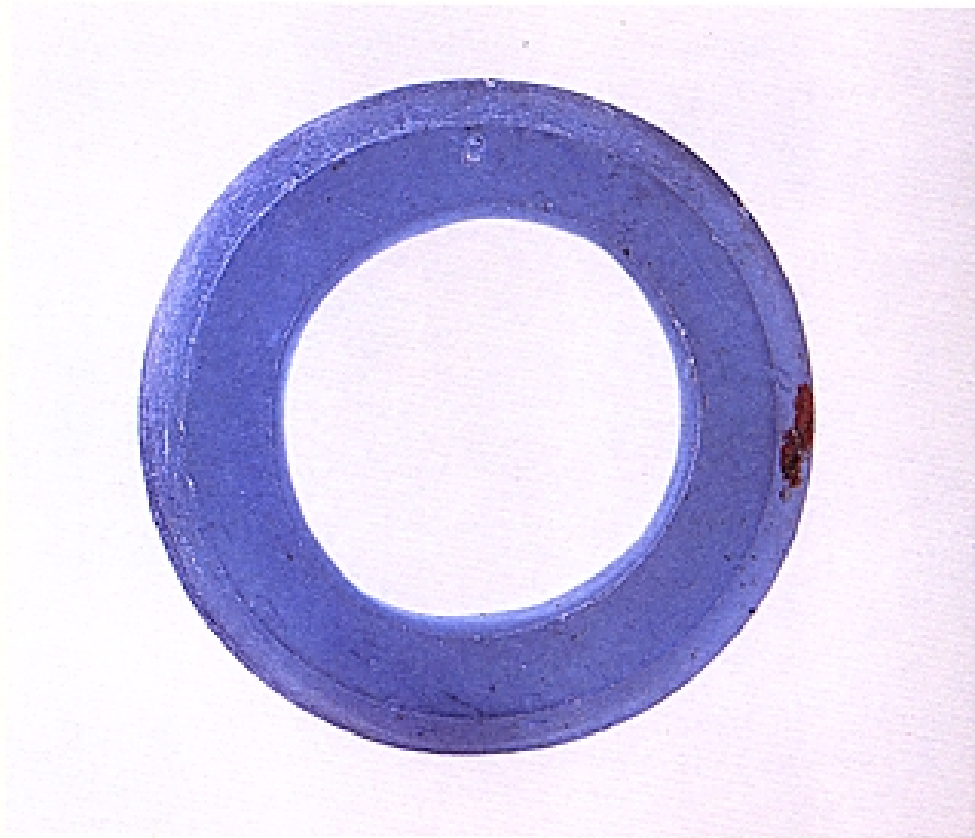
見逃すことのできないのは、鉄剣があわせて十四本も出土し、鉄鏡ほかの鉄製品がみつかったことです。ついで峰山町の赤阪今井墳丘墓(弥生時代後期末半の最大級の方形墳丘墓)に鉄鏡・

やりがんなほかの鉄製品が副葬されていたことがわかりました。従来の見解では、鉄の文化は北九州から始まるとみなされてきました。ところが、最近では日本海沿岸地域での鉄器の導入と鉄製品が改めて脚光を浴びています。

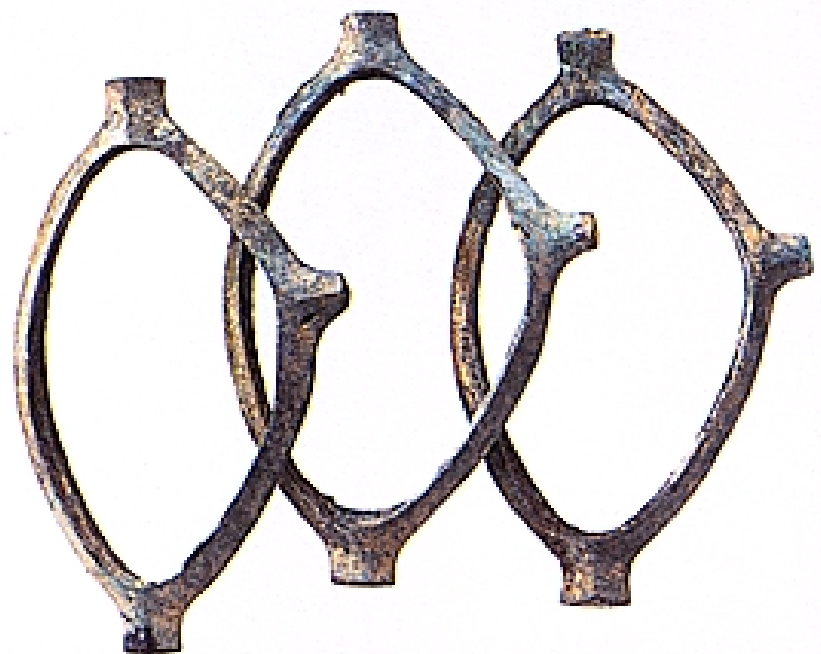
鳥根県安来市の弥生時代後期の塩津山遺跡群で鉄の鍛冶炉と鉄製品、鳥取県青谷町の青谷上寺地遺跡から多彩な鉄製品九十点以上、弥生時代中期後半から後期にかけての鳥取県の大山町から淀江町におよぶ妻木晩田遺跡から鉄器百六十二点などが出土した例をみてもわかりますように、日本海側の鉄の文化のありようが改めて問題になっています。

「三国志」魏志東夷伝の弁辰の条には、「国、鉄を出す、韓・濊・倭皆従つて之を取る。諸市買つて鉄を用う」と述べています。朝鮮半島南部では遅くとも紀元前一世紀から鉄製産が本格的に行われていたことが明らかになっていますが、金海の附院洞貝塚をはじめとする遺跡から、山陰系土器が数多くみつかっていることも注意をひきます。日本海(北ツ海)ルートによる鉄文化の導入とその生産を考える際にも大風呂南墳墓群は重要です。日本海沿岸地域は渡来文化の表玄関の役割をはたしていました。

(上田正昭)



ガラス製剣



銅製剣

メモ●大風呂南墳墓群は、kTR宮津線岩滝口駅より丹海バスで約10分「岩滝」下車徒歩約20分

4 洗者聖ヨハネ天主堂

宮津市

天主堂の中に入ると、濃いコバルトブルーや深い緑、赤のステンドグラスを通したやわらかな光線の中に、びっしり四十四枚の畳が敷き詰められています。ロマネスク風のアーチ型天井を、石のがっちりした礎石に組み込まれた十六本の支柱が支えています。宮津市宮本五〇〇の「カトリック宮津教会」です。

創建は、明治二十九年（一八九六）五月六日。明治村へ移された河原町三条教会と長崎の浦上天主堂とならぶ、優れた明治中期の建築です。正面の十字架像をはじめ五像、祭壇、祭具、壁面の十四枚銅板画も、フランスから百四年前にはるばる船で運ばれてきました。貴重な信仰の象徴であるだけでなく、すぐれた文化財でもあります。柱の黒光りするケヤキは、天橋立のむこう丹後半島の、細川ガラシャ夫人ゆかりの地の原生林から伐り出されたもので、ひんやりした感触が年輪を感じさせます。あおぐとドーム天井のアーチは、十字架とノアの箱舟を形とって荘厳さをただよわせています。和洋折衷なのに、すこしの違和感もなく、しっとりした教会のたたずまいを今に伝えているのは、宮大工さんやアーチの湾曲に腕をふるった船大工さんの苦心の深さでしょうか。

この天主堂を建てたのは、フランスから布教のため来日したルイ・ルラーブ神父です。ミヨン市近くの農村に生まれたルラーブ神父は、二十八歳のとき日本へ赴任します。京都河原町三条教

会でピリオン神父の助任司祭をつとめ三年間、日本語を学んだ後、若狭、丹後、但馬へ出向くのですが、石を投げられたり、かすかすの迫害を受けます。やっとたどりついた宮津の旅人宿「ふでや」のあるじが、なんの偏見も持たずに泊めてくれ、教会用に家まで借りてくれたのがこの地との縁のはじまりでした。「外国の宗教教団には売らぬ」とがんばっていた地主の田井五郎衛門さんが東京で咯血し倒れました。結核菌の発見者コッホの高弟、北里柴三郎博士の「養生園」で療養しますが、在京のビグルス神父に洗礼を受けたあと元氣になりました。「感謝のしるし」と田井さんは、教会の家と隣の下駄屋さん、写真屋さんともども千七百平方メートルの敷地を無償で寄付しました。日置村は、それまで全村が日蓮宗だったそうですが、この田井さんの入信で丹後地方のカトリック教会がはじめて生まれることになります。今も百余世帯、三百五十余人の信者が、ここを献身的に守っています。

憲法の基本的人権には、思想、良心、学問、一切の表現の自由とともに、信教の自由があげられています。ひろやかな信仰心でキリシタン弾圧前の細川、京極時代から、さらに「マリア観音」、「マリア燈籠」などを拜んだ自由人の歴史が、脈々とつながっていたのかもしれない。

（平野一郎）



洗者聖ヨハネ天主堂

メモ●「洗者聖ヨハネ天主堂」は、KTR宮津線宮津駅より西へ徒歩5分

5 舞鶴引揚記念館

舞鶴市

繰り返してはならない戦争の悲劇、引き揚げの歴史を長く後世に伝えるために昭和六十三年（一九八八）に開館された舞鶴引揚記念館は、舞鶴港とともに平和の尊さを訴え続けています。第二

次世界大戦が終わったとき、海外に残された日本人は軍人、軍属が三百三十万人、民間人は三百万人を越えました。政府は昭和二十年（一九四五）九月二十八日に、舞鶴、浦賀、呉、下関、博多、佐世保、鹿児島、横浜、仙崎、門司を引揚港に指定して、速やかな帰国への業務に取り組みます。中でも舞鶴港は十三年間にわたってソ連、中国などからの引揚者六十八万人余りを迎え入れました。せっかく祖国まで辿りついたのに援護局内で亡くなった人は三百六十人、また親を失った孤児も百一名にのぼったのです。

舞鶴引揚記念館は、この歴史を風化させることがないようにと、過酷な収容所のようなすを再現する模型や抑留生活で強いられた労働の実態を記録した写真や絵、彫刻を展示しています。シベリアでの松や楡などの大木の伐採、鉄道工事、石炭の運搬といった重労働は零下三十度から四十度の厳寒の中でノルマを達成しなければなりません。その達成度によって食糧のコーリャンやアワのおにぎりや黒パンの配分も決められ、その分配用に小石でつくった天秤や、手づくりのスプーンが寄せられていて、耐乏の日々を彷彿とさせます。

来館者はヨーロッパや韓国などからも訪ねる人があって舞鶴の町にくりひろげられた「岸壁の母」や「異国の丘」の歌に秘められた人間ドラマを熱心に見学します。

学校の生徒に語り部として体験を語るのは平成四年（一九九二）に発足した「引揚を記念する舞鶴全国友の会」の語り部の会のメンバーです。釜山から舞鶴港に入った引揚船第一号雲仙丸で帰国した神原南さん（七十五才）は特攻隊員として出陣する予定でした。自分が生きているのは、たくさんの方が亡くなって生命をもらっているからで断腸の思いである。その申し訳なさを抱きながら、発展途上国の人たちの食糧問題にも関心をもち続けています。

半農半漁の仕事をしていた森下義晴さん（七十八才）は、シベリアに四年間抑留されていて昭和二十四年（一九四九）六月二十七日にナホトカから舞鶴港へ。父はこの年の四月に亡くなり、兄はニューギニアで戦死でした。木材の伐採をともした戦友は、米のご飯とほた餅を食べたい、と願いながら、木の板に外套を敷いたベッドで息絶えたのです。子どもたちが戦争を当たり前のことのように思わない教育が必要だ。そんな期待を込めて歴史の事実を伝えたいと記念館に足を運びます。

（福田雅子）



メモ●「引揚記念館」は、JR舞鶴線東舞鶴駅より京都交通バスで約15分「記念公園前」下車すぐ

6 学童集団疎開

綾部市

昭和二十年（一九四五）、日本各地の大都市に対する米軍の爆撃が日常化するころ、国民学校（小学校）の三年生から六年生までの学童に対して、空襲の危険のある親もとを離れて山間部に疎開することが命ぜられた。

京都府の場合、同年四月三日の京都府内政部長の「学童集団疎開促進要綱および実施細目」によれば「防空上ノ必要ニ鑑ミ」、親戚縁故疎開を原則とし、それが困難な場合は「勸奨ニヨル集団疎開」を実施するものとした。対象は京都市全域および舞鶴市の指定地域の国民学校とし、予定数は約二万名、疎開先は京都府管内とされ、その宿舎は寺院・教会・旅館・集会所・練成所・別荘等を借り上げて子どもたちを集団収容することとした。

この方針のもとに、同年三月下旬から四月上旬にかけて京都市域から一万三千八百二十九名、舞鶴市から千三百三十一名、および大阪市からの二千三百二十七名の子どもたちが現綾部市をはじめ京都府内の各地に集団疎開した。舞鶴市の場合には主として丹後半島方面に、大阪市の子どもは福知山市とその周辺の村々に疎開させられることとなった。

疎開先では地元の学校へ通学することとなったが、一部は宿舎を分教場として教育を受けることとなった。現地で子どもたち

ちを苦しめたのは、まず、食糧不足だった。たとえば、千歳村（現電岡市）へ疎開した桂校の八月一日の献立は次の通りである。「朝食 おじや、昼食 コーリャン米食、ナスビ、オシタシ、漬け物、夕食 コーリャン米食、キュウリ、漬け物」（「東光寺集団疎開日記」より）。登校日は弁当持参となるが、それも弁当箱の二分の一くらいしか米飯が詰められていなかった。それに加えて疎開先でも「時局ノ要請ニ即応シ、適当ナル勤労作業ニ従事セシムルモノトス」との命令が出されていたため、子どもたちは放課後、または休校して薪運び、桑の皮むき、畑仕事、縄ないなどの作業に動員された。そのため子どもたちのひもじさがよけいにつのった。弁当下口が横行し、中には所持していた学用品を地元の子どもたちに渡して間食をせびったり、裏山で野草や小動物を捕らえて空腹をいやしたりする者も少なくなかった。

加えて、衛生状態も悪く、シラミ、ノミ、ナンキンムシが子どもたちを苦しめた。

敗戦を経て同年十月、子どもたちはやっと親もとへ帰ることが許された。府内の各地にはこのように侵略戦争の余波を受けた子どもたちの足跡と思い出があざとくに残っている。

（仲尾宏）



何鹿郡東八田村(現綾部市)の禅徳寺を宿舎として収容されていた中京区竹間校の子どもたち

メモ●「禅徳寺」は、JR奥鶴線梅迫駅より徒歩15分

昭和七年（一九三二）十二月のことです。香川県のある村の被差別民で古物商を行っている兄弟が、岡山県下津井港から帰航する船の中で、未成年の女性と知合いになったことが事件の発端となりました。

話が進んで、女性と弟との間に結婚話がもちあがり、結局二人は同棲することとなりました。しかし、女性が結婚するためには、職場での借金の返済と父親の承諾を得ることが必要でした。そうこうしているうちに、女性の父親が、警察に捜索願いを出したため兄弟は連行されるといふ事態に発展したのです。

地元の警察は、兄弟が部落出身であることを告げずに女性と同棲したとして、高松地方裁判所予審判事に連絡し、予審判事は、兄弟両名が「特殊部落に生まれ・・・住し」さらに「直ちに帰宅すると結婚を拒否されるので、高松市藤塚町に転宅して同棲をはじめたこと」等から結婚誘拐被告事件としました。

高松地方裁判所の公判でも、担当検事は、「特殊部落」等の差別用語を執ように繰り返しました。傍聴席でこれらの発言を聞いた部落の人達は、抗議しましたが、結局、「出身身分を告げなかったことをもって誘拐罪の一因にあたる」として、二人には懲役刑が科せられました。

この裁判に際しては、すでに予審段階から、いのような問題の

とらえ方に対して地元の水平社が抗議していましたが、判決が出るに及んで、大阪の総本部も、八月全国の支部へ大行進を指示しました（身分あかさなや夫婦になれぬ、差別裁判、差別裁判を踏みつぶせ）東区首頭のメロフィーで請願隊首頭を口づさみながら。

水平社京都府連も田中支部を中心に糾弾の集会を開き、京都府天田・何鹿・加佐の三郡の協議会も全水総本部と共に、昭和九年（一九三四）四月二十一日福知山区裁判所で高松地方裁判所から転勤してきた担当検事や警察と面談を行いました。地元水平社では、福知山公会堂で検事糾弾演説会を開催し、千五百名が参加し責任を追及しています。この演説会がピークでその後の大衆運動の持続は困難だったといわれていますが、裁判長は辞職し、担当検事は同年十二月二十六日福島地方裁判所平支部兼平区裁判所に転勤を命じられました。

この事件は、戦前の最大の人権闘争として語り継がれています。JR福知山駅を降りて東の方向に歩くと、今はもうありませんが市役所前にあった福知山公会堂跡地に辿りつきます。ほんの近くに訴訟を通じて種々の問題を解決している現在の福知山裁判所があります。訴訟の観点からだけでなく、ゆかりの地として別の観点から裁判所を見ると、昔の福知山区裁判所と水平社の関いが二重映しとなって蘇ってきます。（秋定嘉和）



福知山公会堂



福知山区裁判所

×モ●「福知山区裁判所（現福知山裁判所）」は、JR山陰本線福知山駅より東へ徒歩5分

8 夜久野茶堂

夜久野町

丹波但馬の界に広々とした野原がある。

夜久野と名づける東西十里のこの辺りは、民家店屋も有る無しで山犬狼が動きまわり旅客を苦しめた…。

京都は夜久野町と兵庫東山町・和田山町が境を接する県境の道の傍らに柿の樹が一本立っています。ちよろちよると清水が流れる淵をのぞくと二メートル余りの苔むした石碑がひっそりと建っていて茶堂石碑と題した漢文調の文字が刻まれています。

水碑は文政九年（一八二七）に建てられたと記されていて、この地を旅して水が無くて苦しむ人のために、茶を煎じて供した貞心禅師の遺徳をたたえて、その偉業を永久に忘れないでいたいと結ばれています。

文政九年は貞心禅師が入滅して十七回忌に当たり、東源寺の住職石室禅師が、自らの師である阿波興源寺の玉淵大和尚に依頼して文章を作ってもらったとのこと。その頌徳を示す茶堂石碑を木村丑郎さんの意訳によってたどってみましょう。

仏道に使えた貞心は諸国を巡歴して夜久野に至ったとき、草の生い茂る広々として果てしがたいこの地を旅行く人の難儀が多いのを見て、村の主人だった人に募って一軒の僧堂を建立、茶を煎じ往来の人に接待した。

しかし、水が乏しいので星空を利用して天文を伺い、月日を

かけて水源となる宝山を見つけることができた。相距ること一里で遠いが貞心は自ら労をとり水路を掘って茶堂前に水を引く。尽きず湧き出る水は日照りにも涸れず、二・三軒の茶屋や隣り近所の人も、ともに汲みとり潤おった。

貞心禅師は十余年余り大衆に水を施し、清貧にあまんじながら、飢や寒さに苦しむ人には衣類を投げ出し、文化七年（一八一）五月一日に亡くなりました。

碑文には、「生きている人間にとって欠くことの出来ないものであって、峠の坂で飲み水が渴乏を救ったこと、自分から労働にしたがった貞心の辛勤を追慕したく、石にほり刻んだその効が湮滅しないことを望む」と記されています。石に刻まれた文字は、苔の緑を色濃く映しながら、宝山からの水をたたえる碑に、山椒の朱色の実がたわわに覆っていました。碑を距てた道に建つ夜久野茶堂は春秋二回の「大師まつり」の緑日に賑わいを見せます。峠を去ろうとした夕暮れの峠に、茶店風の瀟洒な建物がひとつ、「さわやかトイレ」と書かれた看板には夜久野町、山東町、和田山町と三つの町の名がありました。灯に誘われて訪れると、センサーによって、兎追いしかの山…と「ふるさと」のメロディーが流れて来ました。

（福田雅子）



夜久野茶堂

メモ●「夜久野茶堂」は、JR山陰本線上夜久野駅下車徒歩15分

京都府天田郡三和町大原の里、大原神社を望む川合川は、堤防に並ぶ集落と川原を隔てておだやかに流れています。兩岸に咲くむくげの花に目を移していくと、川のもとに、切り妻屋根の小さな小屋が見えました。へ京都府指定有形民俗文化財「産屋」と記された建物は天地根元通り。中の広さは三畳ほどの土間で、中央の盛砂には御幣が立っています。天井から一本の綱が下がっています。産気づいた妊婦が、この綱を力いっぱい握りしめて生命を産み出した文字通りの力綱です。産屋は大正初期まで出産の場として使われていて、妻が産気づくと夫が川合川に梯子で仮設の橋をかけて妻を連れていき、出産には産婦の母がつきそったといわれます。

平成十一年（一九九九）の一月に大原神社絵馬殿で開催された、シンポジウム・産屋トークの報告書に、佛教大学民俗学研究会の八木透さんは、夫が食事や着替えなどを運んだということから男子禁制とされたのではなく、産屋を使用したのは大原神社のある町垣内の、神社から御旅所までの川に沿った十数件の家の人たちだけということから、産婦を血のけがれとして避けた、穢れ・起源説とは矛盾すると述べています。産屋の隅に並べられた石は、後産を埋めた土の上に乗せたものです。産屋で出産することがなくなった後も、産後に産婦が子どもと一緒に

にここで数日間を過ごすという慣習は戦後まで残っていたとのこと、屋根葺きも村の人々や大原神社の宮司によって守られてきました。

大原神社宮司の林秀俊さんは、神社の縁起を書き綴った「大原神社本記」（寛文十一年（一六七一））に産屋に関してこんな記述があると話されます。「大原神社の御祭神「伊邪那美命」「伊弉諾命」「伊弉册命」「天照大神」「アマテラスオオカミ」「月読命」「ツキヨミノミコト」は天下万物を生成し賜う御大神なれど、特に女人の安産を護り賜う故、宮内の産婦悉く千人万人に至るまで安産であり、産婦はわが家にて産まず産屋にて七日七夜過ごし出産する。その産屋の砂を「子安の砂」といい、よその国まで聞き及びその砂を守りとする事により大神の力を頂ける」と。

夕餉の準備でしょうか、ひとすじの煙が山峽を這っていき、子どもが木の橋を渡っていきました。産屋を振り向くと、白いむくげの花が寄りそうように立っていました。

（福田雅子）



大原神社



産屋

メモ●「大原の産屋」は、JR山陰本線綾部駅より町営バスで約30分「丹波大原」下車すぐ

慶長十九年（一六一四）内藤ジョアンとその家族、妹ジュリアと修道女たちが、キリシタン大名高山右近らと共にルソン島のマニラに追放されました。キリスト教の禁教令を出した徳川家康が、改宗しようとしないう信者たちを国内から追放したのでした。

内藤ジョアンや妹ジュリアは、自分の信仰をあくまでも守り通したいと思いました。この兄妹は八木城（八木町大字八木小字内山六の二、二二三）の城主になったこともある内藤宗勝の子でしたが、長い戦乱の中で、丹波一円はさまざまに武将の勢力が入れかわり、父は敗死、母も殺されるという憂き目にあい、兄妹の運命もゆれ動きました。

ジョアンは、一族のもとに山口から嫁いできたカタリナによって神やキリスト教について話を聞き、十数歳でルイス・フロイスによって洗礼を受けたようです。ジュリアは結婚したのですが、二十二歳で夫に先立たれ、一度は仏門に入りましたが、オルガンチノ神父の説教を聞いて、キリスト教の倫理思想に心の眼を開き、三十一歳で洗礼を受けました。彼女は女子修道会の組織づくりに力をつくし、まわりの人びとから、知性豊かで心清く美しい女性だと信頼されていました。

ジョアンは十五代将軍足利義昭に味方して従軍したこともある、キリシタン大名小西行長に登用され、豊臣秀吉の第一回の

朝鮮侵略、文禄の役の際には、行長軍に加わりました。和平交渉が始まるとジョアンは調和使節に選ばれ、中国の北京にまで赴いて和議を折衝しましたが、結果的にはうまくいきませんでした。

関ヶ原の戦いで小西行長が処刑されてからのジョアンは、加藤清正に仕え、まもなく加賀の前田家に仕えましたが、その間、キリスト教の禁止令は強まってきました。

天正十五年（一五八七）に秀吉が禁教令を出して以来、長崎でキリスト教徒二十六名の殉教があり、慶長十七年（一六一二）には家康によって禁教令が出て、ジョアンら百四十八名のマニラ、マカオへの追放へと続きます。

戦国の世は終りに近づきましたが、戦争に明け暮れたジョアンにとって、もっとも大切なものは神への信仰となっていたようです。日本最初の女子修道会へアタス会を設立して、清貧、貞潔、従順の生活をしていたジュリアにとっても、改宗する気持ちは全くありませんでした。マニラでのジョアンは宗教書や医学書の翻訳、ジュリアは修道院の生活によって、信仰の自由という人権を守りぬきました。



内藤ジョアン碑

メモ●「内藤ジョアン碑」は、JR山陰本線八木駅より徒歩10分

封建社会の厳しい身分制のなかで、町人とりわけ商人に自信を与え、誠実な商人の道が「人の人たる道」につながることを力説してやまなかつた石田梅岩の学問とその思想は、後に「心学」とよばれるようになりました。

貞享二年（一六八五）の九月十五日、亀岡市東別院町東掛（丹波国桑田郡東懸村）の農家に生まれた石田勘平は十一歳のおりに京都の商家へ奉公しました。しかし十五歳のころに帰郷し、二十三歳の時に再び京都の商家（黒柳家）に奉公しました。仕事のかたわら勉学につとめ、「隠遁」の学者であった小栗了雲との出会いによって、勘平の学問はよりいっそう充実するようになりました。

そして享保十四年（一七二九）、京都の車屋町御池上るで講義をはじめました。時に勘平（梅岩）は四十五歳でした。開講にあたって「席錢入り申さず候。無縁にても御望の方々は、遠慮なく御通り、御聞成さるべく候」の掛行燈をかかげたことは有名です。そして「女中がたはおくへ御通り成さるべく候」とも書きそえました。聴講無料で出入り自由、しかも女性の聴講を歓迎したことは、当時にとっては画期的なところみでした。

「学問の至福をいうは心を益し性を知り、性を知れば天を知る」「（都鄙問答）」という「心学」の教えは、神道・儒教・仏

教への深い造詣を背景に具体化しましたが、それはこのころの教育であり、このころの経済であり、このころの経営を力説する学問でした。

萩生狙徠が「商人は不定なる渡世をする者」とさげすみ「商人の満るることをば當て構うまじきなり」（『政談』）とみなしたり、林子平が「町人と申し候は、只諸人の禄を吸い取り候ばかりにて、外に益なき者に御座候。実に無用の殺つぶしに之あり候」（『上書』）などと述べた町人観とくらべて、石田梅岩の「商人の道」は傑出していました。「何をもって商人ばかりを賤め嫌うことぞや」と批判し、「我が教ゆる所は、商人に商人の道あることを教ゆるなり」、「富をなすは商人の道なり、富の主は天下の人々なり」（『都鄙問答』）と説きました。

正直を重んじ、「儉約」の必要と「形による心」のありようを指摘したその思想は、日本型経営理念を提起した先駆的な卓見でした。石田梅岩は延享元年（一七四四）の九月二十四日六十六歳で亡くなりましたが、「人の人たる道」（人権の道）を探求したその生涯には学ぶべき内容が秘められています。

（上田正昭）



石田梅岩の生家

メモ●「石田梅岩の生家」は、JR山陰本線竜岡駅より車で約30分

12 保存された牢屋

京北町

京都から若狭小浜への途次にあたる京北町には、明智光秀が居城をきずいた城山とよばれる山があり、その麓にはかつては牢屋として使われていた建物が今も残されています。牢屋のある家は、江戸時代には村役人をつとめており、その家の庭の土蔵の前に牢屋は建てられていました。

被差別部落が、皮革業とともに警察的職務にたずさわっていたことはよく知られていますが、江戸時代以前の社会では皮革の最大の需要は、よろいや馬具など軍用のものであり、警察の仕事も武士に命じられて従ったものであることを考えると、被差別部落が武士とのつよい繋がりのなかで生まれたことを物語っているといえます。この地にあった部落も、城山に拠った武将に馬具の原材料である皮革を供給するために、つくられたものと考えられます。

この地域は、江戸時代には兵庫県篠山に本拠をもつ篠山藩の領地となり、篠山藩の代官屋敷がおかれていました。この代官のもとで、被差別部落は警察の仕事にしたい、捕らえたものを留め置く施設として牢屋が建てられたものでしょう。この牢屋には窓がなく四方が板でふさがれ、板のすきまからの木漏れ日でようやく漆黒の闇から逃れています。牢屋の壁には達筆で、「入牢も長むしハいやくく」と書かれた文字が今も残っ

ています。

永くここに閉じ込められた人が書いたものでしょう。警察の仕事というのはどのような社会でも必要なものですが、その仕事内容のために人に疎まれやすいものでもありました。江戸時代にあっては、部落にこの仕事を命じたのは武士であったわけですが、民衆の怒みは武士にもかわず、部落にもけられました。このため、部落が差別される原因をこの仕事に求める人も少なくありませんでした。

現在、牢屋の建物は保存され、人権教育の教材として広く開放されています。しかし、その決断にいたるためには、かつては差別の原因と考えた仕事、社会的になくはならぬ重要なものであり、差別の原因は別のところにあるということ、部落の人びと自身が納得していく、地道な取り組みが積み重ねられてきたことを忘れてはならないでしょう。

(山本尚友)



牢屋



メモ●「牢屋」は、JR京都駅よりJRバスで約1時間半「周山」下車すぐ

編集によせて

先年は「人権ゆかりの地をたずねて」の乙訓・南山城編が京都人権啓発推進会議から発行されました。今回はその続編として「丹波・丹後編」をおとどけします。

人権とは人の生命の大切さを知ることにつきます。人は大都会だけでなく、農・山・漁村どこにでも住んでいます。いや、農・山・漁村や地方都市が、かつての首都であった京都や近代日本の大都市の人と文化の源流でありました。

丹波・丹後地域のどこへ行っても、温かな人の息吹にふれることができます。今回もその中から十二編にしぼることは、なかなか困難な作業でした。幸い、ご執筆いただいた先生方のご熱意とご協力で、ともかくこの小冊子の刊行にこぞつけることができました。

この冊子を座右に、ふるさとの人の生きてきた足どりとふるさとの自然に思いをはせて、明日の人権のあり方を心にとめていただければ幸いです。

編集担当 仲尾 宏
(財)世界人権問題研究センター
研究第3部長

この冊子をつくるに当たり、関係の方々に文献、資料の提供や写真撮影などについて、数々のご配慮をいただきました。厚くお礼申し上げます。

<執筆者> (掲載順)

上田 正昭	京都大学名誉教授・研究センター理事長
田端 泰子	京都橘女子大学教授・研究センター客員研究員
平野 一郎	元愛知大学教授・研究センター理事
福田 雅子	NHK解説委員・研究センター研究第4部長
仲尾 宏	京都芸術短期大学教授・研究センター研究第3部長
秋定 嘉和	池坊短期大学教授・研究センター研究第2部長
辻 ミチ子	京都文化短期大学教授
山本 尚友	研究センター専任研究員



錦絵 安寿姫と對王丸(古今百人烈女鑑) 一風斎国安作(天保(1830-44)晩年)
 山嵐太夫に買われ、由良の浜で慣れない汐汲みや柴刈りをする安寿と厨子王の
 姿を描く